
たぶん、それすらも必然で

紫條 たすく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たぶん、それすらも必然で

【Zコード】

Z0222F

【作者名】

紫條 たすべく

【あらすじ】

家路を急ぐ帰宅時。繁華街の真ん中で、恭太はついつかり先輩である匠に告白をしてしまう。突然の告白に戸惑う匠。忘れてくれ、と言い捨てて恭太は逃げてしまつが……。

「ばっかじやねーのかお前

5月、とはいえた方になれば寒い。それでも時間は夕飯の買い物をする人や、家路を急ぐ人、あるいはこれからいつぱい飲みに行こうか、

と浮かれるサラリーマン等々でごった返した駅前の繁華街の真ん中に、少年の何とも穏やかじやない声が響き渡った。

当然、道行く人たちは何事かと足を止めて振り返る。

しかし、当の本人はそんな事は全くお構いなしだった。

少年の身長は170センチくらい、年の頃は17、8くらいであろうか、グレーのブレザーにエンジ色のネクタイを身につけた姿は、すぐそばにある進学校に通う生徒である事が容易に知れる。今時少々時代遅れに見えてしまつ、襟足で切りそろえられたまつすぐな黒い髪は、彼の通う高校の校則故だろう。少し長めの前髪からのぞく瞳は大きくて、笑つたらきつと愛嬌のある顔だろうと思わせるが、今はきつくり上がつてゐる。

そんな彼が町中でいきなり罵倒した相手は、その横に片手で顔を押さえてため息をついていた。

それはそうだろう。罵倒されるにしても喧嘩するにしても時と場所等言う物があつて、こんなにギャラリー満載の所でやらなくても、と誰しも思う。顔を隠したくなるのももつともな事だ。

絶望的なため息をついている少年は罵倒した方よりも長身で、おそらく一八〇センチはあるだろうか。顔は手に覆われて見えないが、罵倒した少年と同じ制服に身を包みつつも、真新しい制服で後輩と言つ事がわかる。

普段だつたら人混みに紛れてしまいそうなこの一人が、光が丘商店街の中で今この時に限つては、一番注目を浴びていた。

怒鳴った方の少年は海野匠、怒鳴られた方の少年は藤崎恭太といつ。

数分前まで、彼らは「」普通の高校生らしく一緒に下校している最中だつた。もうすぐ春の大型連休。そんな浮かれた気分で。

「で、どこ行く？ 映画とか？」

「男同士で映画つてのもなんか不毛……てか、恭太、お前彼女は？」

「あー……」

「また別れたのかよ。」

視線を泳がせる恭太に匠がつっこみを入れる。

「んつとに長続きしねえな……。好きだつたんだろ？」

「いや……ええーと……」

さらに視線を宙にさまよわせる恭太。好きです付き合つて下さいと、相手に言われたから付き合つてみただけ、とは言えない。

「……好きでも無いのに付き合つたのかよ」

「……付き合つてみないと好きになれるかどうかわからぬいし……」

よく知りもしないで断るのも失礼……」

「本気でもないのに付き合う方が、よっぽど失礼だよ」

至極もつともな事を言われて、恭太はますます居心地が悪い。

「お前、ちゃんと人を好きになつた事あるのか？ 無いからやうやつて、女の子気持ち弄べるんじやないか？ いい加減やめとけよ悪趣味な……」

「好きになつた事なんか、あるよ」

匠の言葉を遮るように、恭太はいつになく低い声で言つた。

「え……？」

「いるよ、好きな人くらい。」

「じゃあなんで好きでもない女の子と付き合つんだよ。お前そんないい加減な……。」

「違うついい加減なんかじゃない！ ただ、望みがない想い抱えて

ても仕方ないから、誰か他の娘と付き合えば忘れられるかも……で。

「望み無いつてお前、どんなやつ好きなんだよ……。」

匠にそう聞かれて、恭太は一瞬苦しそうな顔をする。じつと匠を見つめた後、うつむいて。

絞り出すような声で、言った。

「アンタ、だよ。」

「恭太お前何考えて生きてるん。」

先ほどの罵声からほどんど声量を変えずにそう問いつめられた、恭太は、それはこっちが聞きたい、と内心でぼやいく。

自分の告白が原因で罵倒されているのはわかつてはいても、やはり時と場所という物がある。

時と場所を考えることまもなかつた自分の告白を棚に上げて、恭太はそう思つ。

「一々何かを考えて誰かを好きになる訳じゃないし、どうしてこんな事になつてるかなんて、俺の方が聞きたいくらいで。」

まして相手が男となつたら、話はどう考えたつてなかなかハッピー エンドに向かわない事くらい重々承知していたし、だからこの思いを自覚してからは絶対に、ばれないようにと気を張つっていた。はづだつた。

等と云つ事をぐるぐる考えたといひで話は全く前に進まないのはわかつてゐるし、いこうつたら場所が悪いとか、他の所へとかそんな事を言つても、納得する相手でもない。

被害を出さないためにも、恭太は口元を押さえ極力小さい声で、

「……俺がアンタ好きだつてのにそんな長つたらしい能書きでも必要?」

返した言葉はもう、いつそ潔いほどの開きなおりつぱりだった。

「好き……つて、あのなあつ……お前それつ、わかつて、俺……つ」
さすがにすべてをおおっぴらには語れないのか、絶句氣味に返つて
きた言葉は、好奇心いっぽいに聞き耳を立てているギャラリーに伝
わり、ざわめきが広がっていく。

いきなり男に告白されて、焦るのは仕方ないにしてもここまで罵
倒されて何考えているのかわからない、と言つ顔をされたら望み薄
だな、と恭太は判断する。

とりあえず、結果どうあれこれ以上この場に残りたくないのは山
々なのだが、たとえばここで相手の手を残して自分が逃亡すれば、
さらに好き勝手な憶測が広まるのだろう。

そしてここはどこで学校関係者が見ているかわからないし、おそ
らく知り合いの一人や二人はいて、家に着く前には絶対おしゃべり
雀の口から親兄弟の耳にはいるのも確実だ。

ならば、きつちりはつきり、振られる所まで見せてやるつじやな
いか。恭太は腹をくくると、口元に笑みが混じる。もちろん、苦笑
だが。

しかしそれをどう誤解したのか、匠はさらにむつとした顔をにな
つた。

「何笑つてんだよ。てか、笑うところか？」これ。

怒つてる。完璧に怒つてる。そんなのは恭太にだつて良くわかっ
ている。ふざけているとも思つてゐるのだろう。そんな姿も可愛
い、とか思えてしまう恭太もかなり末期的なのだが。

「……まさかお前、俺の事からかつたんじゃないだらうな？」

今から実はそうでしたと言つたら、この騒ぎはチャラになるだろ
うか。

うか。
否。

他の誰がそれを許しても、目の前にいる自分の思い人は白黒はつ
きりさせなければ納得してくれない相手である事を、恭太自身が一
番よく知つていた。

そして、白黒はつきりさせたいのは自分もだ。こんな所ではつき

りさせることになるとは思いもしなかつたが。

「違う。」

「へ？」

不意に笑いを止めて返った言葉に、匠はきょとん、として聞き返す。聞こえなかつたらしい。だからといって、ギャラリーに聞こえてしまつような声で物を言つつもりはなかつたが。

「からかつてないです。ここで言つつもりはなかつたけど、まあ、結果的に口から出してしまつた事を否定するつもりないから……けど。

「一拍、深呼吸をして。

「これで、終わりにするから。」

「おまえ、何いつて……。」

覚悟を決めた恭太の勢いについて行けなくて、匠は若干戸惑つたような雰囲気をにじませる。

けれど、待つ気はなかつた。

「今の態度で、十分、返事になつたから。明日からいきなり好きなやめますつて訳にいかないけど、そういうのにじませないようにするから。てか、忘れて。今日の事、全部。アンタの友達つてポジションまで降りる気は、ないからわ。」

一方的な宣言にあっけにとられた匠の口が『待て』と動き出す前に。恭太は、自分の言いたい事だけを言つとその場を逃げるようになつていった。

生まれた時から死ぬまでの行動は予めDNAにインプットされている。

そんな言葉をいつだつたか、匠が言っていた。それが本当だとしたら、今ここで自分が失恋するのは、しかも相手が男だつたりするのも、さらに衆人環視の元だつたりする事さえも、DNAに組み込まれていた事なのだろうか。（そして、あの場に居合わせてしまった人達のDNAも……）

なんて事を考えたところで起こつた現実は変わらない。あの場所はおそらく学校関係者も目撃しているだろう。

明日登校したらどんな騒ぎになつていいか。いや、そんな事はいい。幸い恭太の声は周りにほとんど聞こえていなかつただろうから、どのようにもごまかせる。

「ごまかせなかつたとしたところで人の噂も七五日、そのうち飽きるだろう。

それよりも問題は、匠だ。無かつた事にしてくれ、と逃げてきたが、果たして忘れてくれるだろうか。

おそらく無理であろう。匠が、あれで納得するとは思えない。絶対、明日顔を合わせればなにやかにやと聞いてくるだろう。それを考えると憂鬱になりながら、恭太は自宅のドアを開ける。

「ただい……」

「恭太！ アンタホモになつたんだつて？！」

「お兄ちゃんやめてよ往来で恥ずかしい！」

帰宅の挨拶を言い終わりもしないうちに、玄関で待ち受けていた母と妹の言葉に、恭太はがつくりと首をうなだれた。耳に入つているだろう、とは思つたが……。思わずその場にめり込みたくなつたが、沈黙すれば好いように解釈されるだろう。

たとえ一人の言つている事が眞実に近いとしても、今ここでそれ

を肯定するわけに行かないのだ。

「誰がホモだよ……変な誤解やめてもらえる。」

「だつて聞いたわよ。光が丘商店街のど真ん中でなんだか男の子ともめてて好きがどうこうとか……。」

「誰に。」

「お向かいの奥さん。たまたまお買い物中に見たんですって。携帯から電話あつたのよ。今は情報はリアルタイムなんだから。」

メール一つ打つのに大騒ぎしているくせに、何がリアルタイムだよ、これだから主婦つてやつは……。と、恭太は心の中で悪態をつく。「ちょっととした意見の相違でホモにされたらたまらねー一つの。単純に向こうが嫌がる事を、俺が好きだつていったもんだから、怒りだしだけだよ。」

「本当に? なんか尋常じやない雰囲気だつたつて聞いたけど?」

「本当だよ。つたぐ、この調子じや近所中で俺はホモだつて言われそうだな。母さん、ちゃんと否定しておけよな。」

そう言つとまだ納得していない様子の母を置いて、恭太は自室に向かう。

「待つてよお兄ちゃん。」

二人のやりとりを横で見ていた妹の優衣が、後を追いかけてくる。

「なんだよ、まだ何か言いたい事あるのか。」

「……入つていい?」

何か言ひづらそうに視線をさまよわせる優衣。

「……汚いとか騒ぐなよ。」

適当にあしらつても引いてはくれなそうな姿に、恭太はため息をついて言つと部屋の中へ誘つた。

「で? 母さんに聞かれたくない話か。」

手に持つた学生鞄をベッドの上に投げて、悠太はブレザーを脱ぎ捨てる。

「……ハア……。」

優衣はため息をつくと、それをその辺に落ちていたハンガーに掛け、

クロゼットに入れた。いつもなら山のような文句が出そうだが、部屋に入るときに騒ぐなと言われたせいか、黙つたままで。

「……海野さん、でしょ？」

「あ？」

いきなり、優衣の口から匠の名前が出る。何度か恭太の家にも遊びにた事があるから、妹もその名前を知つていた。

「お兄ちゃんが振られた相手。」

「あんな、さつきの話聞いてなかつたのか？」

「あんな見え透いた嘘、信じられるわけ無いじゃない。母さんだって、だまされてる振りしてあげてるだけよ。」

そう言い切つて、もう一度溜め息。

「お前、身内にホモになつて欲しいのか？」

「やうじやないわよ！」

強く言い切ると、きつと恭太を睨み付ける。

「そうじやないけど、なんとなく話聞いた時、海野さんの名前が浮かんだのよ。」

「なんでやうなるんだ？妄想力逞しいな。俺はいいとしても、勝手に先輩をホモにするのはどうかと思うぞ。」

妹の思ひこみを何とかやめさせようと、恭太は混ぜ返すように軽い調子で返す。それでも、優衣は引く様子を見せなかつた。

「何でおにいちゃんはいつもそうなのよ！自分の事にはぜんつせん興味なくてどうでも良くて、人の事ばっかり……。」

「優衣……」

「いつだって、別にいいよつて、なんにも興味のない顔して、何かを選ぶときだって私を優先してくれるけど、本当に欲しくなくて言つているのか、我慢してるとか、わからないの。我慢させてるんだとすれば、それは私なのに……。」

「別に我慢なんとしてないって。」

「……女の子と付き合つて別れた時だってそうじやない。相手の子がお兄ちゃんの事好き勝手言いふらしても気にしない、言わせて

おけつて。いつつも、自分の事はビリでもいこつて、そういうのを私小さい頃から見てきて。」

「始めの勢いはビリへやら、優衣の声はだんだん小さくなる。

「初めて、海野さんつれてきた時に思つたのよ。こんなお兄ちゃん、私知らないって。」

「別に普通にしてただろう?」

「自覚無いの? 海野さんと話してるとお兄ちゃん、すげに楽ししそうだつた。活き活きとしてたし、一人とも遠慮無く言いたい事言い合つてる感じがして、私一人の会話に全然入れなくて。その時思つたの。あ、お兄ちゃんこの人の事好きなんだつて。」

「だからどうしてそつなる……。」

「もちろん変な意味じゃないわよ。友達として、だと思つたの。なんのになんでかな、今日お向かいのおばさんの話聞いたときに、海野さんだるうな、つてわかつたのよ。やうなんでしょう? お兄ちゃんさつき否定しなかつたし。」

否定しなかつたわけではなく、いきなり名前を出されとつて反応できなかつただけなのが。

「お兄ちゃんにホモになつて欲しい訳じゃないけど、何となく、あの人ならしうがないかなつて。お兄ちゃんとられても。」

「……つたく、考えすぎだよ、全部お前の。」

「でもつ……。」

「もう馬鹿な事考えるなよ、な? 別に俺は、お前が言つたような事全然考へてもないから。ほら、着替えるから出て行けよ。」

強引に話を切り上げようとする恭太に、優衣はまだ何か言いたそうに視線をよこしたが、しかしそれ以上は言おつとせずに、

「……わかつた……でもお兄ちゃん、忘れないでよ。誰が何言つても、私もママも、お兄ちゃんの見方なんだからね。」

それだけは忘れないでね、と念を押し、部屋を出て行つた。それを見送つて、恭太は疲れ果ててベッドに身を投げる。

「ガキだガキだと思つてたんだけどなあ……。」

思いもかけなかつた妹の言葉。

嘘をついた自分。我慢なんてしてないと。それは妹を思うが故の嘘で、そう言った事を後悔してはいない。してはいなけれど……

恭太は、3人兄妹の2番目の中間として生まれた。上に兄、下に妹。兄とは5歳、妹とは2歳の年の差。

物心が付いた頃にはすでに妹がいて、まだ乳飲み子だった妹に母は付ききりで、甘えたくても甘えられなかつた。

「お兄ちゃんなんだから我慢してね。」

その一言で、何も言えなくなつた。自分の我が儘や望みは押さえる物。

そうして過ごすうちに、恭太は自分を押さえる事、諦める事を覚えた。そんな恭太の対外的な評価はいつだつて、「物わかりの良い、聞き分けのいい子。」

身に付いた習慣は家の外に出ても同じで、どこに行つてもそう言われ続けて。気がつけば自分の事には無関心で周りの意見を優先させる事が多かつた。

けれど本当は、もつと親にだつて甘えたかつた。欲しい物を欲しいと言いたかつたと、そつだだをこねる、我が儘で底意地の悪い自分がいる。

十数年間がぶり続けた猫は、気がつけば恭太自身が自分の真意がわからなくなるほどに大きくなつて、最近では自分の本当の望みすら見失つてしまいそうだつたのに。まさか優衣にそんな自分を見透かされているとは思つていなかつた。

『海野さん、でしょ。』

まさか、たつた一つ譲れないと思つていた想いまでが、見透かされていたとは。

「めんどくせえ……。」

あの場面をあれだけの人間に見られていた事も、妹の突然の指摘も。

明日からの学校生活の事も何もかもめんどくさいと。

そう呟くと、恭太は瞳を閉じた。

海野匠、と言つ少年に出会つたのは3年前。中学3年の時だ。

。中高一貫教育で知られる私立西華学園の入学式。恭太は中等部2年で、匠は高等に外部入学したばかりで。

中等部と高等部合同の入学式で、在校生は迎える立場として強制的に参加。通り一遍に行われる式は、毎年同じ内容で退屈する。とはいへ、元来決まっている事を無視できる性格でもない恭太は、かつたるいと思いながらも講堂へと渡り廊下を歩いていた。

朝に弱いため遅刻ギリギリで登校したおかげで、クラスメートはすでに式に向かつた後。遅刻する事自体は気にしないが、それに付隨する担任のお説教が嫌で、慌てて走つていた時に、講堂の方からやつて来た少年にぶつかった。

前方不注意による正面衝突。気づいていなかつたのはお互い様だつたと思う。

にもかかわらず、相手は

「いつてえ！ 走るならちゃんと前見ろよなー！」

と、思い切り怒鳴つたのだ。

この頃はまだ恭太も背が伸びる前で匠とそつ身長が変わらなかつた。お互い頭を思い切りぶつけ合ひ、額を抑えながら相手を確認する。

見た目だけでは年上か年下か図りかねたが、真新しい制服に胸につけた白い造花で、本来ならここにいていいはずのない、新入生である事は見て取れた。

「……なにやつてんの？」

謝る事すら忘れて、恭太はそうつぶやく。

「はあ？ お前とぶつかったんだろ、見てわかんねえ？」

「や、そうじやなくて……。講堂に行かなくていいわけ？」

「式？ ああ、かつたるいから抜けてきた。つか、お前、謝るくら

いしるよー。」

絶対的に恭太が悪い、と言い切るその態度もさる事ながら、悪びれもせず入学式をさぼると言い切るその態度が、恭太には信じられない。

そんなに面倒ならはじめから登校しなければいいのに、等と言えば、目の前の相手はおそらく更にに怒るのだろう。

「あー『めん、けどそつちも……。つて、あんた中等部?』

仕方なく謝りつつの恭太に、

「高等部だつ……ついでに俺の名前は、海野匠だ……」

怒る匠に、こんなに気が短かつたら、人生疲れそうだなあ、と恭太は思ったのだった。

ちなみに、この後もちろん式には遅刻し、恭太は結局担任のお説教を聞く事になった。

匠は、眠くなりそうな事は『めんだ、と遅刻しつつも式に向かう恭太とは反対方向に駆けていき……。のちほど職員室でみつちり絞られる羽目になるのである。

海野匠の名前は、校内で有名になつた。それはそつだりう。入学式をさぼつた、なんて事は前代未聞だ。

とは言え、高等部と中等部に分かれている恭太と、匠の接点はほとんど無いに等しい……はずだった。

にも関わらず、何故かやたらと接触する事が多かつた。まずは掃除当番。西華学園の掃除当番は、各教室以外の場所は縦割りでグループが決められる。入学式の数日後、くじで決められた掃除場所で一度目の遭遇を果たす。

「めんどくせえ……。」

掃除用の竹箒を片手にそつ咳きながら恭太ぼーつとしていた。

「ちょっと、眞面目にやつてよ。」

見どがめたクラスメイトの古居清美がヒステリックに声をかける。何故か中学入学から同じクラスの彼女は、恭太のそれなりに親しい数少ない友人である。

小柄で陸上部のエースである清美は、どちらかと言つとかわいい、愛嬌のある顔つきをしていた。髪の毛は少年のように短かっただが、大きな目と愛らしげの口元のせいか、性別を間違えられる事はない。むしろ、そのさつぱりとした性格で誰にでも好かれていた。

その清美と親しいと言つ事で、やつかまれたり付き合つていると噂されたりしたが、恭太にしてみれば「冗談ではない。お互い恋愛の対象だと思つた事は一度たりとも無いのだ。

「やつてられつかよ……裏庭の掃除なんて。したつてしなくてたつて、大してかわらねーし。」

「そこでぼーっと立つていられると邪魔なのよ。」

清美はそういうながら、わざと恭太のいる辺りを躊躇はいた。埃が舞つて、恭太がたまらず後ろに避けた、その時。

「いてえ。」

誰かにぶつかつた。いや、踏んだと言つべきか。

「え……？」

後ろを振り向くと、ジャージ姿の少年がちりとりを持つて座り込んでいた。踏んだのは、その足だつたらしい。

「あ、すみませんっ。」

何故か足を踏んだ恭太より先に、清美が頭を下げる。そして、肘で恭太をドン、と押した。

「あ……すみま、せん……。」

「あのれ……お前、俺にぶつかつたり踏んだりするのが趣味なわけ？」

「え……？ あつ……。」

恭太はなんの事かわからず相手の顔を見返す。そして思い出した。入学式の日にぶつかつたあの少年だ。

「しかも彼女に先に謝らせんって……。」「

「彼女じゃありません！」

恭太と清美が同時に、否定の言葉を叫ぶ。匠は一瞬面食らった顔をしたが、

「ぶつ……お前ら、そんな思いつきり同時に……おつかしいやつら。

」

足を踏んだ事はもう忘れてしまったかの様に、笑う。

「ま、いいや。お前らもここ掃除担当？ てきとーによろしくな。

」
そう言って立ち上がると、んじゃねーと手をひらひら振って匠は教室へと行ってしまう。

「…………ねえ。」

「あ？」

「…………さぼり…………？」

清掃終了のチャイムは、まだ鳴っていなかつた。

掃除の一件からしばらくした、放課後の図書室。恭太は教師に授業に使つた本を返すために立ち寄つた。本を読んでいるよりは外で身体を動かしている方が性に合う恭太は、こういつた用事でもなければ、図書室になど足を踏み入れたりはしない。

司書の担当教諭に本の陳列場所を聞き、林立する本棚の中向かうと、指定された一番奥の棚の窓際に床に座り込んで眠り込んでいる匠の姿を見つける。なるほど、この場所なら死角になつていて、思う存分昼寝が楽しめそうだ。窓から差し込み日差しがまともに顔に当たつて暑そうではあつたが。

恭太は手にした本を棚に戻すと、そつと近くにより窓のカーテンを閉める。

「ん……。」「

と、匠が気配に気付いたのが身じろぎをすると戸口を開けた。

「あ、すみません、起こしかゃいました?」

本当はやつせと立ち去るつと思つていたけれど、ぱつちりと視線が合つてしまつてはそつもこかない。

「……変なやつ。」

親切にも口差しを避けてやるひとした相手に、匠は失礼な事を言い放つ。

「普通さ、こんな所で何やつてるんだとか言わない?」

「……俺、別に図書委員でも風紀でもなんでもないですし。」

しつつと言つて放つ恭太に、匠はふつと笑つた。

(笑うと印象変わるなあ。)

掃除の時にも想つた事。少しきつめの匠の顔が、笑うとなんだか可愛くなる。年上とは思えないほどに。

「なんか良くなわすけどさ、なんだっけ、名前。」

「中等部2年の藤崎恭太です。」

「あ、年下なんだ。俺は……。」

「海野匠先輩、ですよね。高等部一年の。初めて会つた時、聞きました。」

「あーあん時なー。」

そういうや言つたつて、と一人ごちながら、匠は立ち上がりべつと伸びをする。

「あのや。その先輩つて言つつのやめない?」

「え、でも先輩ですし……。」

「たかが一歳の差でがたがた言つなつつの。それにその敬語もなんかやだ。おれ、堅苦しいの嫌い。」

「えーとじやー……海野さん……。」

「やーめーるー!! サブイボたつ!」

よほど嫌なのか、がんがんと足を踏みならしつつ嫌がる匠に、恭太は困つて首をかしげる。じゃあなんと呼べばいいのかせつぱりわからない。

「匠でいい、匠で！ で、敬語禁止な！」

びしつと人差し指を突きつけて宣言する匠がおかしくて、恭太はふつと吹き出した。

「……くく……、て、てか、アンタ無茶すぎ……。」

「何がだよ。」

「や、だつて……アンタ誰にでもそんな？」

「悪いか？」

「悪いかないけど……。」

かなり破天荒だ。これくらいの年頃はたつた数ヶ月の差でも先輩後輩と騒ぎ立て、威張りたがる輩も多いというのに、この態度。貴重と言えば貴重だが恭太には壮絶におもしろかったし、興味深かつた。

先輩後輩の垣根を越えるなど、恭太の思考ではあり得なかつたし、だからこそ呼びつけなどもつての他だと思つていたのに。

「アンタ、おもしろすぎ。」

「わあるかつたな。俺にしてみりや、お前も十分おもしろいぜ？」

「どこが？」

「わざわざカーテン閉める所とか。今のその反応も十分おもしろい。」

普通力一杯笑われれば氣を悪くする所だが、匠は全く氣にもとめていない。

「じゃあ、お互い様つて事で……。だけですね、先輩？ 他の連中の手前堂々と呼びつけってのもどうかと思うので……とりあえず、一人の時だけつて事で、勘弁してもらえませんかね？」

恭太はそういうて悪戯っぽく目配せる。

「しゃーねえな、それでいいわ。」

「りょーかいです。じゃ、俺の事も恭太つて呼ぶつて事で。匠？」

それでいいよ、と匠が笑つた。

何故か、その笑顔に心が浮き立つた。

それから一人は、示し合わせているわけではないのに校内で出会う機会が増えた。

学食で出会えば、当然のように一緒に食事をし、登下校の最中に出会えばたわいのない事を話ながら一緒に歩いた。

中等部と高等部、不思議な取り合わせの一人に、周りの人間は首をかしげたが、当の本人達でさえ、何故こうも接触が多いのかわからなかつた。

付き合つてみれば、匠が自分と正反対な性格である事はすぐに知れた。先ず、言いたい事をいい、人に遠慮などしない。気が向いた事には全力でぶつかっていく。納得のいかない事は絶対にしない。

一言に曰にはめんどくさいと呴き、すべてにおいて適当に手を抜く恭太から見れば、疲れる性格に見えた。

なのに、何故かウマが合づ。

「しいて言えば、偶然なのかな。」

「何が。」

昼食を食べ終わり、ジュースを飲みながら呴く恭太に、匠はうどんを食べる箸を休めず視線をあげて問いかける。

「いや、良く会うよなあ、と思つて。」

「世の中本当の偶然なんてそんなに転がつてねえよ。」

「どんぶりを空にして、箸を置くと匠はそんな事を言った。」

「じゃあここで一緒に昼飯喰つてるのも全部必然だつて？」

「DNAに組みこまれてるんだつてさ。生まれてから死ぬまでの行動。なんかの雑誌に書いてあつた。」

「……それ、女口説く特に使つた方ががいいと思つ。」

憎まれ口を言う恭太に、うるせ、と言い返した時、

「相変わらず仲がいいわねえ。」

座っている一人の頭上から声が振つてくる。

「なんだ、古居か。」

清美が学食のトレーを持って立っていた。

「やんなっちゃう、混んでて。藤崎、隣空いてるならすわつていい？」

断る理由もなくて、恭太はうなずく。しかし本当は、匠と一人で話していたかった。

「海野先輩、失礼します。」

恭太には見せないような笑顔で、清美は女の子らしく笑つて椅子に座つた。

『あたし、海野先輩つてタイプかも知れない。』

そんな事を、いつだつたか清美は本人を前に言つてのけた。

その場にいた恭太はこいつはいきなり何を言つたのだと焦つたが、匠の方は動搖もせずに

『でも俺古居みたいなタイプつて女として扱えないわ』

ときつぱり返していた。

速攻失恋でどうなのよ、と清美は冗談っぽくばやいていたが、それでもその後匠を避けるでもなく、恭太と共にいる時などに話しかけている。

匠の方も時に意識する様子もなく、普通に対応していた。

「お前、良く喰うな。」

コロッケ定食に素つどんがのつたトレイの上を見て、匠が呆れ顔の匠。

「あら、だつて私部活もあるし結構力口リー必要なんですね。大会近いし、しつかり食べてしつかり練習しなきや。」

けろつとして言い返す清美に、匠はなるほどと頷いた。

「所で先輩、さつきのDNAの話、本当ですか？」

「俺は専門家じゃないし、そんなの知らないよ。雑誌で見ただけ。古居そんなの興味あるの。」

「だつてロマンチックじゃないですか。それっていつか出会う恋人も生まれる前から決まっているって事でしょ？」

「ううう所は女の子らしく、清美はうつとりした顔をする。

「女つてすぐそういう事言つなあ……。たとえば明日学校遅刻したりとか、古居が風呂入るときどっちの足から入るとか、そんな事もDNAで決まつてるとしたら、全然ロマンチックじゃないんだけど。

「風呂……つて、やだ、先輩……。」

真っ赤になる清美を横目で見ながら、恭太はおもろくなかった。清美の事は嫌いじゃないが、彼女が匠との間に入つてくると何か疎外感を感じてしまう。

今もこの会話に割つて入りようがない。清美は食事をしている間席を立つ事はないだろうし、ここにいてももう、何か話す事もないような気がした。

「俺、先行きますね。」

他の生徒がいるときは先輩扱い。そのルールに則つて敬語でそう言って席を立つ。

昼休みも半分の時間が過ぎたとは言え、ごつた返した学食の中。席に座つて友達と談笑をしている生徒達を見ると、少し寂しくなるけれど、ここにいたら清美に邪魔だとか言い出しそうだから。

「藤崎？」

いきなりどうしたんだ、と言いたげに呼びかける匠を無視して、その場から足早に立ち去つた。

学食や図書室、職員室などがある棟から中等部へ向かう渡り廊下を、恭太は足早に通り過ぎる。

（なんで俺、こんなにムカムカしてんだる……）

清美とはずつとそれなりに仲が良かつたし、友人を挟んで話を事は、なんて事無いはずなのに。

自分には見せない「女」の顔で匠に接する姿に、本気で虫酸が走

つた。

(俺……古居が好きなのか……?)

と考えてみて。恭太は知らず首を振る。考えるだけで背筋が寒い。あり得ない。

「ちょっと待てよ!」

首を振つている恭太を、誰かが呼び止める。振り返ると、匠がいた。寒くなりかけた気持ちがその顔を見るだけで暖まる。

「お前、いきなり勝手に行くなよ。どうしたんだよ一体。」

「え……いや、別に……」

「嘘付けよ。」

「本当になんでもないって……てか古居は?」

いくら何でも食事を一人でさせているのはかわいそうでは、と言いつくになつた時。

「あのさあ!」

匠が声を荒げた。

「言いたい事があるなら言えよ!」

「は?」

「自覚無いわけ? いつもいつも何か言いたそうな顔をして、でもあきらめた表情で、そうやって一人でなんでもないつて言つてるけど。言いたい事があるなら言えよ。」

「別に、言いたい事なんて……。」

「嘘付けよ。今だつて思い切り不満たらたらな顔してしてるくせに。なんでそんなに自分を押さえてばつかなんだよ。欲しい物があるならあきらめるな! 俺ら子供はもつと我が儘でいいはずだろ? !」

匠らしく言い切つた言葉に、恭太は目を見張る。

今まで物わかり良く、聞き分けよく、そう育つてきた中で、だれもそんな事をいつてはくれなかつた。

初めて言われたその言葉に、なんと返していいかわからなくて、恭太は絶句する。

「つてお前、何泣いてるんだよ? !」

「あ……え……？」

指摘されて初めて気がついた。しかし止めようと思つても止まらない
くて。

「ショーガねえなあ。肩貸すから5限始まる前に涙出しきつちまえ。

いい年して、と蔑むでも笑うでもなく、匠は恭太の頭を抱いて自分の肩に乗せた。

恭太は、声を出さずに肩をふるわせて泣いた。誰かに見られてい
るかもとか、そんな事は一切考えずに。
たぶん、こんなに泣いたのは赤ん坊の時以来だつただろう。
そしてこの時気付いた。この人が、好きだと。

慣れない事はする物じやない、と恭太は思つ。

欲しい物は欲しいと言つていい。 そういうたのは匠だった。 うつかりと出してしまつた言葉はやはり、恭太の思うようにはいかない。 欲しい物は手に入らない。

一晩中眠れずにいたから目が赤い。 洗面台の前で恭太はため息をつく。

「お兄ちゃん。」

控えめに、優衣が声をかけてくる。

「よお。 なんだ？」

いつも通り、何もなかつた顔で明るく答える恭太に、優衣は表情を曇らせる。

「目、赤いよ。」

「あ？ ああ、夕べちょっと徹夜でＤＳをな～。」

「私じや、相談に乗れない？」

「ばーか。 そんなせつぱ詰まつた問題も無いつての。」

優衣が本気で心配しているのはわかつたけれど、長年培つた「お兄ちゃん気質」はそう変わる物じやない。 第一、妹に弱みを見せるなんてかつこ悪い。

「遅刻するぞ、早くしないと。」

ぽんぽん、と優衣の頭を軽く叩くと、恭太は玄関に向かった。

期待を裏切らないにも程がある、と。

自宅を出た瞬間恭太はめまいがするかと思った。 “行つてきます” の言葉を言いつつ視線を外に向けた瞬間、そこに匠の姿を見ついたからだ。

相変わらずのきつい瞳と視線が合つた瞬間、恭太は絶句する他になかつた。

「どうかしたの？」

様子がおかしい恭太に、母親から声がかかる。

「なんでもない、気にしないで。」

昨日の今日だ。匠の姿を見たら母親にどんな誤解されるかわからぬい。恭太は嘘くさいと言われそつなくらい、どびきりの笑顔を作ると、

「おはよー。」

と、匠に声をかけた。これには匠も虚をつかれたようだ、

「……はよ。」

フイ、と視線を外してぶっきらぼうに答える。それきり、何から話そうかと、思案気に黙り込んでしまった。

「とりあえず、遅刻するから。」

そう促すと、恭太は匠の横に並んで歩こう、と促す。それが、いつも通りのはずだから。わざわざ迎えに来たのは初めてだつたけど、登校途中で出会う事があれば、並んで雑談しながら歩くのが常だつた。

しかし今、横に来た恭太に対しても匠は肩を揺らす。それに恭太は気がつかない振りをした。昨日の事は無かつた事にする、と決めていたから。

かまわず歩き出したが、匠はそのまま動じつとしない。

「……どうかした？ 本気で遅刻するけど……今日はさぞがりつもい？」

「おまえっ……っ」

振り向いて、何食わぬ顔で声をかける恭太を、匠はきつと睨み付ける。

「どうにうつもりだよっ！」

周りに憚つてか、大声を出しあしなかったものの、十分に怒氣を含んだ声で問いつめられて。

「どういうつもりって……？」

匠の言いたい事を十一分に理解しながら、恭太は敢えてわからない

振りをした。

それが、火に油を注ぐ行為だと言つ事は、十分にわかつた上で。

「とぼけんなつ……昨日の事……！」

案の定、ぶち切れた匠には、すでに周囲を気にする余裕など無くなつたようだ。少し前にいた恭太に詰め寄ると、襟首に掴みかかつてくる。

「昨日？ なんかあつたつけ。」

それが最低な行為である事を重々承知した上で、恭太はとぼけ通す。そうすると、昨日言つたはずだと、掴みかかる匠に視線だけで告げて。

「お前、何考へてるんだよ……。」

蒸し返すつもりはない、そんな気持ちが伝わつたのか。匠は困惑した顔をする。

「普通に、オトモダチしたいって、それだけだけど？」

我ながら白々しいせりふだと思いつつも、自分と匠の間にあるか細い縁を切るまいと、答える。けれどそれが逆効果だつたらしい。

「オトモダチ？ あんな事言つておいて？」

「だから、あんな事つてな……がつ……」

どこまでも空とぼけようとする恭太の顎に匠の拳がヒットした。襟首を捕まえていた指が離れ、恭太は反動で尻餅をつく。

「ふざけんな！ ほんつと、冗談じやねえよ！ おれがどんな気持ちで一晩過ごしたと思つてんだよつ！ 無かつた事にしろだ？ こちどり一度聞いた事を一瞬で忘れるほど器用にできちやいねえよー。」

こいつもさう器用じやない、と恭太は内心で呴きながら、立ち上がる。

切れた匠の声はもう、遠慮会釈無く大きくなつていて、幸い周りにはいないが、いつ誰が出てくるかわからない。どうするにしても、ここでこのまま話をしているのは得策ではない。

「あのや、話があるのはわかつたから、とりあえず人気のない所に

移動した方がいいんじゃない？ 騒がれても面倒だし。」

恭太自身も努めて冷静に、とは思つても、この先頭に血が上れば何を口走るかわからない。そんな所を家族に見られるのはごめんだ。

「……人気がない所つてどこだよ。」

「昼休みに、屋上。」

自宅から学校まではたいした距離はないし、この辺りは住宅街で、人気のない所など見つけるのは困難だ。

それなら、学校に行つてしまつた方が、人目を避けるのは容易。「なんで昼休みなんだよ。」

「……頭、冷やした方がいいし。お互に。」

「おまえ、逃げるんじゃ……」

「逃げないから。」

約束は守る、と言いきる恭太に、匠は渋々頷いた。

本当は逃げたい気満々の恭太だった。

案の定、登校した途端に恭太はクラスメイトに囲まれた。口々に、昨日の事を聞いてくる。うつとうしいとは思つても、恭太の口から説明しなければ納得しなさそうな連中に、恭太は昨日母親に言ったのと同じ言い訳をした。

匠の方も何か聞かれるかも知れないが、あれだけの不機嫌オーラを出している匠が、まともに答えはしないだろう。必然的に、恭太の言い訳が校内に広まる事は時間の問題だった。

それで、全員が納得するとは思えなかつたけれど。

時間が止まつてしまえばいいのに。

退屈な授業、眠つてしまいそうな教師の声。昼休みの事を考へると、とてもじやないが勉強に身が入るわけが無くて、恭太はふと視

線を横に向ける。クジによる席替えで決まつたその席は、窓際の一
番後ろ。校庭がよく見える席だった。

視線の先、体育の時間なのか体操服姿の匠が見える。一の席になつてからこんな事が良くあつた。

基本的に気が向かない事は徹底的にやらない匠だが、体を動かす事は好きらしく、体育の授業の時は活き活きとしていた。そんな姿を見るのが、この席になつてから恭太の密かな楽しみだった。

しかし、今日は様子が違う。

もとより細身の体は体操着の中で泳いでいるようで、頬りない。けれどそれだけではなく、遠目に見るその顔はいつもよりも白く見える。その上、動きも緩慢だ。

（体調でも悪いのかな。）

恭太がそう思った瞬間。

匠の体がふらついたかと思うと、その場に崩れ落ちるように倒れた。

周りにいた生徒達と、体育教諭が慌てて走り寄り、あつという間に匠の姿は見えなくなる。しばらくして、クラスメイトに背負われて運ばれる姿。恭太はさらに落ち着きを無くし、今すぐにでも保健室へかけていきたい気持ちになる。

それからの数十分、授業は全く身にならなかつた。

授業終了のチャイムがなり、授業終了の礼をおざなりにすると、恭太は教室を飛び出した。行き先はもちろん、匠が運ばれたであろう保健室。

何しに来たのかとか、帰れとか、そんな事を言われるかもしれないけれど、じつとしている事なんてできなかつた。普段健康優良児の匠が倒れるなんて、きつとよほどの事だ。

事と次第によつては、昼休みの約束もなしにしなければならない。何より、匠自信の身体の方が心配だつた。

勢いだけで保健室の前まで行き、足を止める。今、匠が一人でい

るのか、それとも誰かが付き添っているのか。それによつて恭太も対応を変えなければいけない。一人でいればいいのだけど。

「そう思つたとき、中から声が聞こえた。

「寝不足で倒れるつてお前、間抜けすぎ。」

低く通りのいい声は、確か匠のクラスメイトの声だ。それに、匠の声が応えた。

「悪かつたな、桂。」

「おう、自覚してるならいいけどな。倒れるほど寝不足つて、何していたんだよ。」

「…………。」

返事をする気がないのか、応える匠の声はない。

「いいけどな、別に。病気とかじやないならさ。けど、あんまり心配させるな。保険医、ちょっと会議で留守するけど、少し寝て行けつて言つてたし、休んでいけば？」

「うん……。」

おやりぐ、本当に匠を心配しているであらうかの言葉に、素直に頷く気配。

「じゃ、俺授業始まるから行くな。」

桂がドアに近づく気配がして、恭太は慌てて一步後ろに下がる。ガラリ。

引き戸を引いて出てきた桂と、まともに目があつた。

桂は長身で、軽く一九〇はあるだろうか。運動部に所属しているだろうと推測できる、健康的に焼けた肌。黒くて短く刈り込んだ髪に鋭い眼光。鼻筋の通つたきりつとした口元。かなり迫力のある風貌で、恭太は一瞬気押される。

匠と一緒にいるところを数度見かけた事はあつたが、まともに会うのは初めてだ。おそらく自分の事など知らないだろうと、恭太は軽く会釈だけして保健室に入ろうとした。

「あれ。お前、匠と良くつるんでるよな。」

すれ違いざま、桂に止められる。

「あ、はい。」

「何の用？ どつか怪我でもしたわけ？」

桂の言葉には、何故か棘が含まれている。恭太と匠の間にあつた事を知つてゐるとは思えないのに、何故。

嫌われたり恨まれたりするには、接点もないのに。

「た……海野先輩が、倒れたのが見えたんで……。」

「心配できたわけ。てかお前、匠の何？ どういう関係？ わざわざそんな事でここまで来るほど親しいの？」

ほぼ初対面に近い人間に、いきなりなんでこんな事まで聞かれなければいけないのだろうか。さすがにむつとした恭太は、應えず桂から視線を外す。

「何でもいいけどね、俺は。あいつ今寝不足で疲れてるみたいから、ほつといてやつてくれない？」

ある意味言い分としては正しいのかもしねだが、あんたに言われたくない。恭太は内心でそう呟く。

何か、桂は恭太に反発心を起させた。

恭太は口を一文字に引き結び黙つたまま、しかし桂に保健室に入れるのを阻まれて、二人の間に緊張が走る。

「……桂？ どうかした？」

と、中から匠の声がした。ぎょっとして中を見ると、ベットから起きあがつた匠が顔を出していた。

「な、なんでもないよ。お前寝てろつて。」

焦つたのは桂も一緒のようで、応える言葉に詰まつていた。

「てか、そこに誰かいるのか？」

様子がおかしい、と感じたのか桂に言い含められる事なく、匠はベッドから裸足で抜け出し、ドアに向かつてきた。

「だれもいねーって……匠つ。」

桂の制止などどこ吹く風、ドアの所までやつて来てしまつ匠。ひょい、と桂の身体を避ける避ける様にして顔を出す。

「……恭太……」

いるはずのない人間を見た、とでも言いたげな顔で、匠は目の前の人物の名前を呟いた。その隣で、桂が会わせたくなかつた、と言つ顔をしている。

恭太は、一体何故桂にこんな態度をとられなければいけないのか、それが疑問でならなかつたが、それよりも目の前の匠の方が気になつた。

「窓から見てたら……アンタ、倒れるの見えたから心配になつて。『悪かつたな、心配かけて。ただの寝不足だよ。』

桂に気を遣つてなのか、匠は口の端に少しだけ笑顔を作つてそいつた。けれど、目は笑つてないし、そもそも恭太を見ようとはしない態度に無理がある。

それは、一緒にいる桂にも伝わつてゐるようだ、

「ほら、心配ないつてわかつたろ。気が済んだら、さつさと自分の教室戻れよ。」

恭太を追い返そうとする。だからといって易々と引き下がる恭太ではない。

「先輩にこんな事言つのもなんですけど。」

そう、言い置いて。

「なんでそこまで言われなくちゃいけないんですか。海野先輩に帰れつて言われるならともかく、桂先輩に言われる筋合いは無いと思うんですけど。」

「んだと? お前なあ……。」

「待つてよ、桂つ。」

険悪になつた二人を、匠が止めた。

「恭太も、やめろつて。一人とも、悪いけどちょっと俺ちょっと寝たいから、一人にしてもらえる?」

他でもない恭太にこう言われてしまえば、一人とも従うしかない。

匠は桂を保健室から押し出すと、ドアを閉じてしまった。

残された二人は、しかしそうにその場から立ち去らない。

「お前、匠をあんまり振り回すな。」

先に口を開いたのは桂だった。ただし、中の匠に聞こえないよう、小さく低い声で。

「どういう意味ですか。」

「とほけんな。あいつの寝不足の元凶、だろ、おまえ。」

はつきりきつぱりと桂は言い張るが、恭太にはなぜそう思われるのかさっぱり理解できない。昨日の事を、匠が吹聴しているとも思えないし、憶測だけで言つてるのであれば、とほけておくに限る。

「俺が……？ なんでそんな事思うんですか。ただの後輩ですよ？ 俺は。」

「お前なあ……っ！」

関係ない、としらを切る恭太を、桂は正面から睨み付けた。恭太の方も負けてじと睨み返す。

しばらく睨み合つた後、桂が溜め息をついて視線をはずし、保健室を振り返る。

「ただの後輩、か……。」

「そうですよ。そういう先輩こそ、海野先輩とどういう関係なんですか？」

恭太は一番の疑問を桂にぶつける。しかし桂は応えなかつた。

「本当に、自分がただの後輩だつて思つなら……おまえ、匠のそばから消えろ。」

そう言つて、もう恭太の方を見る事もなく去つていつてしまつ。

「ワケ、わかんねえ……」

残された恭太は、頭を抱えた。それくらい、桂の態度は謎だつた。

昼休み。恭太は昼食もせずに屋上に向かつた。授業中に倒れた匠の体調を考えれば、最低限食事くらいはとるだらう。であれば一人で待つ事になるが、それでもかまわない。

落ち着いて昼食などとつていられる精神状態じゃなかつた。

朝は行きたくない話を聞きたくない、等と思つていたが、今はそんな事言つていられない。寝不足だつたと言つけれど、本当に大丈夫なのか、体調は少しでも良くなつたのか、それを早く確認したかつた。

そして、桂という男との関係も。

階段を上りきると、屋上へ行く扉の横にある窓に手をかける。本来であれば立ち入り禁止の屋上で、通常は扉には鍵がかかっている。が、その横にあるガラス窓は引き戸になつていて、ちょっといじるだけで窓がはずれるようになつていた。それを利用して屋上に出る事を、恭太に教えたのは一足先に高等部に入つていた匠だ。恭太は慣れた手つきでガラスを外すと、窓枠に飛び乗つた。人一人やつと通れるような隙間を抜けて、屋上に出る。

そこにはすでに、匠の姿があつた。

金網に寄りかかり、校庭を見下ろしている。恭太はすぐに声をかけず、その姿を見つめた。

一八歳、と言う歳にしては華奢な後ろ姿。初めて会つた時から、身長も体重もあまり変わつていらないように見える。

しかし匠はその身体に似合わず、パワフルな面も兼ね備えている。自分の気が向けば何でも全力投球だから、文化祭や体育祭等と言つたイベントの時は、必ず先頭切つて仕切つていた。

適当に、周りに文句言われない程度に手を抜いて、できるだけ樂をしようとする恭太とは何もかもが正反対だ。

欲しいものは欲しい。けれど、欲しいものを手にするためには努力を怠らない。

欲しいものは諦めるもの。そんな風にして大概適当に諦めてきた恭太には、匠の事がまぶしかつた。

要領が良くなつて、何も手に入らない。匠を見ていると。それに気付かされた。

『欲しい物は欲しいって言つていい。』

匠に言われた言葉。その言葉は魔法の呪文のように、恭太の中に残

つて響いた。

よく考えれば、恭太にとつてどうしても手に入れたいものなんて、無かつたのかもしれない。横から妹や他の人間にとられても諦められる程度の執着。

欲しいと思えば、手に入らなかつた時にがっかりするから。最初から無いと思えばいいと、そう思いこんで。

そんな恭太が、初めて、欲しいと心から望んだもの。それが、恭太の存在だった。

どんな関係でもいいから離れたくないと。

そんな事を考えながら背中を見つめいたら、気配に気付いたのか、匠が振り向く。

「来てたなら、声かければいいのに。」

朝の激情とはうつてかわつて静かな声が響く。

「……早かつたけど、飯は？」

問い合わせられて、恭太は首を横に振つた。

「俺も。なんか喉通らなくて。」

アンタに早く会いたくて。そう、恭太が言つてしまえたら話は早かつたかもしれない。けれど、その言葉を口にできるほどには、まだ恭太も素直ではなかつた。

「……寝不足、平気なの。」

「ああ、気を失つて少し寝たから平気。」

「……俺のせい？ 寝られなかつたのつて。」

恭太の問いに、匠は瞳を伏せる。

「なんでそう思うわけ。」

「……俺が、昨日あんな事言つたから。」

「あんな事……てなに。」

そう聞き返されて、恭太は口ごもる。

「無かつた事、なんじゃなかつたのか。お前が、そうしたいんだろ

？」

「そう、だけど……。」

「そう、だけど……。」

それでも、倒れる姿を田の当たりにしてはいつも言つていられない。

「だいたいさ、お前どうつもりなの。」

「え……？」

「どうこうつもりで言つたの、あんな事。」

「匠は真っ正面から聞いてくる。」

「そんなの、好きだからに決まってる。」

そう思いながら、即答できない恭太。けれど黙つていれば、誤解されるばかりで。

「冗談じやないつて言つたよな。からかつてるわけでもないつて。ならなんで言つたんだよ。言つたすぐに、無かつた事にしろつて言う程度の気持ちなら、始めから言わなきやいいだろ。おまえ、こつちの気持ち全然考えてない！」

言われた言葉は、ほとんど想像したとおりのものだったけど、最後の一言が胸に刺さる。昨日のあの告白は確かに、自分の気持ちを吐いてしまいたいといつ自己中心的なものだった。

「ごめん……。」

「別に謝れつて訳じやないけど……。」

素直に謝られて拍子抜けしたのか、匠は気まずそうにそっぽを向く。再びしばらくの沈黙が流れて、次に口を開いたのは恭太だった。

「桂先輩……て、アンタのナニ。」

先輩に対しての口の利き方ではなかつたが、今更そんな事を気にする匠でもない。

「ナニって……友達。」

「ただの友達が、俺の事アンタを振り回すなとか、関わるなとか、寝不足の原因は俺だとか、そんな事言つわけ？ ずいぶんお節介だな。」

恭太の声に、若干皮肉めいた響きが混じる。

「昨日の事、あの人話したの。」

匠がそんな事するわけ無いとわかつていて、妙にしゃべくれた感情がそんな言葉をぶつけさせる。

「お前……俺の何見てるんだよ。俺がそんな事するわけ無いだろ。」「じゃあ、ただの友達があんな口出しするくらい、付き合いが親密つて訳だ。」

こんな事を言いたい訳じゃないのに、桂と対峙した時のどす黒い感情が、匠を責めるような事を言わせる。

「……桂は、幼なじみだから……心配してるんだる。余計な言われたらなら悪かっただな。」

先ほどまでの霸氣はどこへやら、奥歯に物の挟まつたような言い方をする匠に、恭太はイライラする。

「別にアンタが謝る事じゃないでしょ。」

本当に言いたい事はこんな事じゃないのに。いつになく氣弱な瞳で自分を見つめている匠に、恭太自身、どうしたらいいかわからなくなる。

何を言えばいいのか、さえも。

「……今、桂は関係ないだろ。」

「確かにそうですね。」

自然と、本当に自然と、匠の嫌いな敬語になる。いつなると恭太自身止めようもない。イライラしている、と言葉で表してしまつ。

「……お前、ほんと訳わからねえ。」

その言葉で、恭太のスイッチが入る。

つかつか、と匠のそばに近寄ると、その両手を持つて乱暴に金網へその身体を押しつける。

「アンタが……っわかるうとなんとしてしないんでしょ「うがつ……」「きょ……」

「どういうつもり？ そんなの、好きだからに決まつてる！ 好きだから、伝えたいって思つたんだ！ 欲しいものを欲しつて言つて言つたのはアンタだ！ だから欲しいつて言つた！ アンタの事が！」

激情のままに言葉をたたきつける。

あまりの勢いに言葉を失つて、ただ自分を見返してくるだけの匠。

その目を見つめていると想いが止まらなくなる。

腕を捕まえていた片手を離し、そつとその顎に手を添える。両方の手を片手で上にまとめられて、何をするのか、と匠が口を開こうとした瞬間。

「んつ……」

先ほどの勢いが嘘のような優しさで、恭太自分の唇をそつと匠のそれに重ねた。

ぎゅっとかみ締めた唇をなぞるように、恭太は唇を移動させる。触れるだけのキスはそれだけでも十分、恭太の頭をしびれさせる。けれど、身体をよじらせる気配を感じて、恭太は我に返った。

「「めん……」

相手の意志を無視してまで、こんな事をしたい訳じゃなかつた。掴んでいた手を離して、一步、後ろに下がる。

「どうして……。」

「アンタそんばっかな。」

殴られると思つたけれど、匠はただ呆然として疑問を投げかけるばかり。

「俺、ちゃんと好きだつていつたよね。わかつてない？」

「ちが……。」

「いいんだ、わかつて無くても。俺はアンタにキスしたいし、抱きたい。そういう意味で、好きになつてた、けど。」

恭太は言葉を切ると、自嘲気味に笑う。

「本当はそんな事どうでも良くて、なんか子供みたいにアンタが欲しいってそれだけで。だから、こういう事して嫌われたくない、振られるくらいならただの後輩としてでもそばにいたい。ともかくあんたから離れたくない。だから、忘れてつて言つた。アンタが、俺の事そういう意味で好きになるとも思つてないから。とりあえず気持ちだけぶつけられればいいやつて。それで寝不足にさせたんだつたら悪いと思うけど。」

匠はまだ黙つて恭太の言葉を聞いている。なんのアクションもない

と言つ事が、恭太を不安にさせた。そつきの行為を責めなり、責めてくれた方が気が楽なのに。

「ねえ、ほんと、忘れてくれない？ それで今まで通り付き合えれば俺、もうこんな事言わないししないから……ってえ！」「いきなり、匠の平手が恭太の頬を叩く。

「このおーばかやう。何が欲しいものが欲しいから欲しいって言つただけだ、だよ。お前、全然変わつてない。俺がお前の言う事わかつてないつてんなら、お前だつて俺の言う事聞こうともしてない。始めから全部駄目だつて決めつけて、結局手に入らないつて、俺の意志なんて聞く氣もないんだる。」「

「て、わざわざ振られるほどマゾじゃないつて……てえつ！」「

叩かれなかつた頬にも、平手打ち。

「なんで振られるつて決めつけるんだよ。お前は俺か？ 答え聞きもしないで決めつけて自已完結するつて、どんだけ俺の意志無視するんだよ。馬鹿にするな。」

そういうつて、匠は扉に向かつて歩き出した。

「じばらぐお前とは絶交……。」「

すれ違いざま、そう呴かれて。

「い……いやだつ。」「

恭太は考えるよりも先に身体が動いていた

匠の手をつかむと後ろから抱きしめる。

「嫌だつてお前、子供じやあるまいし……。」「

「嫌だ……絶対……。」「

子供のようにそう繰り返すしながら、わざわざうつ抱きしめてくる恭太に、匠はため息をつく。

「だからお前、ちょっと落ち着け。俺こんな事言いたい訳じやなかつたけど、今のお前相手じや何言つても無駄っぽいし。別に一生口きかねーとか言つてるんじやなくて、少しインターバルおいた方がいいつて言つてるんだよ。」「

「でも……。」「

「 言つ事聞かないなら一生絶交。」

「 そういわれて、情けない事に。本当に情けない事だが、恭太は匠を抱きしめる腕をほどいた。

「 人の話、ちゃんと聞く気になつたら、来いよ。それまでは、俺からも声かけないから。」

「」

渋々ながら、恭太が無言で頷くのを確認して、匠は鮮やかに笑うと、ひらつと軽やかに窓を飛び越え姿を消す。

その後ろ姿を見送つて。

「 落ち着け.....たつてなあ.....。」

恭太はするすると座り込むと、頭を抱えた。

「振られ男、何やつてるの。」

放課後。昼休みのやりとりを考えると何もする気がおきなくて、誰もいない教室で自分の席に座りぼーっとしていた恭太に、陸上部のユニフォーム姿の清美が声をかけた。

「なんだよ、それ。」

「知らないの。みんな藤崎の言い訳なんて信じてないわよ。」

おもしろくないしね、それが本当だったとしても。やうやく清美は、少し怒つていてるよつで。

「なんか怒つてる?」

恭太が聞くと、むつと眉をひそめてつかつか、と教室の中に入つてくる。

「当たり前でしょ。私が先輩に振られてるの知つてるくせに、藤崎がちゃんと告白してるなんて。無神経にも程があるわよ。」

「お前……本気だったのか。」

いつかの会話を思い出して、恭太は少し驚いた。どちらも、あまり軽く話していたから、『冗談だとばかり思つていた。

「本気よ。だから、本気で拒否られたくないから、『冗談ですませたのよ。それくらいわからいないわけ?』それに、先輩好きな人いるみたいだもん。」

清美は泣きそうな表情でそつそつと唇をかむ。嫌われたくない。その気持ちを恭太にも理解できる。

「まあ、俺も振られたし。」

なんどもごまかしようはあつたけれど、清美に嘘をつくなれなくて、そう言つた恭太に、

「あんた、ばつかじやない?」

「お前なあ……。」

「だつて、嫌いつてきつぱり言われたの? 先輩に。違うでしょ?」

「お前、何言つて……。」

顔を真っ赤にして言いつのる清美に、恭太は戸惑つ。言われている意味が全く理解できない。

「なんでそんなに鈍いのよ？ まさか本当にわかつてないとは思つてなかつたけど。中等部の頃、先輩とやたら接触が多かつた事とか、全部偶然だつたとも思つてるの？」

「つかお前何言いたいのかわつぱりわからないんだけど。」

「しんつじられない。」

深くため息をついて。

「普通に考えてみてわからないの？ 学年も違う校舎も違う、なんになんで海野先輩は藤崎と一緒にいる事が多かつたのか。あのね、言つちやなんだけどあの先輩の一般的な評価つて、藤崎が知つている人の人とはだいぶ違うわよ？ 愛想だつてそんなに良くないし、取つつき悪いって。それが藤崎といる時だけは、すごく柔らかい雰囲気になるの。それがどういう事だか、本当にわからないの？」

愛想が良くないのはともかく、取つつきが悪い匠など想像もした事がなかつた。恭太と一人でいる時に、他のクラスメートと接触しても、決して拒否するような事はなかつたし、普通に接してから。清美の言う事を、にわかに信じられない。黙り込む恭太を清美はどう判断したのか。

「これ以上は悔しいから言わない。振られたつていじけてたければ、ずっとといじけてなさいよ。」

そういうて、足早に教室を出て行つてしまつ。ドアを、ぴしゃんと思いつ切り閉めて。

残された恭太は頭を抱えてため息をつく。清美の言葉を信じるなら、少しは自分に望みがあるのかも知れないと思える。しかし、本当に信じていいのか。単純に、乙女の妄想と言つ事もある。

「あーもう、なんだつてんだよつたく……。」

匠に言われた事、清美に言われた事その他諸々で混乱しまくつた恭太は、そのまま机の上に突つ伏した。

『しばらくお前に話しかけないから。』

と言った匠の宣言は、どうやら本気だつたらしい。ここ数日といつ物、校内で匠の姿を目にする事がほとんど無くなつた。気がつけば、一緒に遊ぼうと話していた大型連休も過ぎ去つてはいる。

唯一、体育の時間だけが匠の姿を見る唯一の機会だつたが、しかしそういう時はいつだつて匠の隣にあの桂がいて、それが無性に腹が立つ。やたらと親しげにじやれ合つたりしているのを見ると、授業中にもかかわらずカーテンを閉めたくなる衝動に駆られるほどに。こうなつてみて初めて、清美に言われた事を実感する。

学年も違う相手がそうそうその辺ですれ違つ確率など、そもそも低くくて。しかもこの場合おそらく匠は意図的に恭太を避けていて。もしかして会いに来てくれていたのだろうか、と希望的な観測をしてみたりいや、それは思い上がりすぎだらうと思い直してみたり。それはともかく会えない事が寂しくて、いつそ自分が3年の教室に行つてみようか等と、恭太にしては珍しく能動的な思考になつてみたり、ともかく感情の起伏が激しくて、自分自身でも疲れてくる。それでもいい加減頭も冷えてきた。ただただ、好きだと突つ走つていた気持ちが落ち着いて、匠の言葉を冷静に考える余裕も出来てきて。

『世の中に偶然なんてそう転がつて無い。』

いつだつたか言われた言葉。あれだつて深読みしようと思えばいくらでも出来る。DNAの話も、そうだ。取りようによつては、恭太と匠が出会つた事も運命だつたと、そう聞こえる言葉。

それに、匠は絶交を言い渡す時に「一生絶交」とは言わなかつた。本当にいきなり好きだと言つてきた恭太を嫌悪するならば、自分の話を聞けるようになつたら来い、等と言つはずもない。

自分と会わない間引きつと、桂が当然のように匠の横にいるのだ。

色々と悩みもしたし、考えたけれど、それが我慢できない。自分が、匠の隣にいたい。

あの日の噂はまだ消えていない。あれから匠と恭太が一緒にいなかつたせいで、勝手な憶測までついていた。今、恭太が匠と話をするために3年の教室に行けば、さうにエスカレートするかも知れない。

けれど。

（言いたきや言えばいいさ。）

恭太は開き直つた。終業のホームルームが終わると、速攻で教室を飛び出す。匠を、捕まえるために。

3年の教室。同じ校舎の階違いで作りも1年の物とほとんど変わらないといつのに、足を踏み入れた事のないそこは、恭太にとつて知らない世界のようだつた。

すれ違う上級生はどこか大人っぽくて、近寄りがたい。気軽に匠と話せていたのが不思議に思えてくるくらいだ。

だからといって臆してもいられない。匠のクラスは3年2組。まだホームルームが終わつた直後、帰宅をしようとする上級生でじつた返す中、意を決して教室の中をのぞく。

しかし、教室の中に匠の姿は見つからなかつた。

「あの、海野先輩知りませんか。」

ドアのそばにいた上級生に控えめに声をかける。

「海野？ あれ？ もう帰っちゃつたかな？」

しかしその上級生は匠の行方を知らないようだつた。

「そうですか……。」

手当たり次第聞いて回つたりしたら、田立ちすぎるだらつ。ここは

一旦引いた方がいいと恭太はきびすを返す。

何を言われても、もう別に気にはしないけれど、必要以上に田立

つ必要もない。

3年の教室を後にしながら、恭太は匠の行方を考える。良くいる所等はないだろうか。単純にトイレと言つ事も考えられるが。もしくはすでに帰宅済みか。

と、そこまで考えて、好きだと言いながら匠の事をほとんど知らない自分に気付いた。人となりは知つている。だけどそれだけ。普段どうしているのかとか、どこで時間をつぶしているのかとか。そんな事を知ろうとしなくても、匠の方から自分に歩み寄つてくれていたから、それに甘えていた。自分から知ろうとしなかった。

（よくそれで好きだとか言えたよな、俺。）

自己嫌悪に陥りかけるけれど、しかしだからと言つて、匠の行方を搜す事をあきらめるわけに行かなかつた。最悪、家まで押しかけよう。何より、今勢いがあるうちに動かなければ、明日になつたらまた足踏みしそうだつた。

わからないならしらみつぶし。さすがにトイレの前で待つような暴挙に走らなかつたが。

恭太は匠とあつた事のある場所を手当たり次第に探す。図書室、裏庭、学食。いるかも知れないという所をいくら探しても、見つからなくて、さすがにもう帰つてしまつたかも知れない、と思う。時間はすでに最終下校時刻の30分前。特に部活をしているわけでもない匠が、学校に残つている可能性は低かつた。自宅に行つてみようか。そう思いかけて、一力所忘れていた事を思い出す。

屋上だ。

ここにいなければ校内はあきらめよう。そう思いながら、恭太は窓枠に手をかける。

と、その時。

「やめるよ、もうお前。見てられねーし。」

誰かがいたらしい。どこかで聞いた声。

「別に見ててくれつて言つてないし。」

それに答えた声は、やたらと聞き覚えのある物で。さう、匠の声だつた。

「かわいくねえぞ、その反応。」

「別に桂に可愛いと思われたくもないし、第一俺男だから可愛いとか言われても全然嬉しくないんだけど。」

どうやら一緒にいるのはあの、桂らしじ。やつと見つけたと思つたのにお邪魔虫付きかよ、と恭太は嘆息する。桂がいたのでは、伝えたい事も伝えられない。どうしようか、と思案する間にも一人の会話は続いている。

「そこで一々男だなんだにこだわる辺りで十分可愛いけど。」

「どうでもいいよ、そんなの。」

匠の顔は見えないけれど、むつとしているのであらう事が声からもわかる。恭太は不本意ながらも、そんな匠の反応を桂と同じく、可愛いと思えてしまう。

「まあどうでもいいけどな、俺は普通に女の子が好きだし。だから幼なじみがホモになるつてのはいただけない。」

「なんだよそれ。」

「とほけるなよ。あいつだら、お前が最近やたら食欲無くしている原因。まともに食べてんのかよ、元々細いくせに。」

「余計なお世話だつて。それにちゃんと喰つてるし、言つてる意味わからねーし。」

「お前と、あの1年が付き合つてるつて。噂立つてからずつと変だろ。あのガキの方は一応否定したみたいけど、お前は否定も肯定もしないで黙つてるから好き勝手放題言われてるの、知らないはず無いだろ？」

（やつぱり、何も言わなかつたんだ、あれに関して……。）
多分そうだろうとは思つていた。あれを一々相手にする性格なら、あんな往来で大声であんなやりとりはしていない。

沈黙した匠に、桂がため息をつく気配。

「好きなんだろ？あのガキが。ここしばらく離れてるだけでそんなやつれるくらい、好きなんだろ？」

「ほつとけつてばもう、ほんとに……。」

言い返す言葉はしかし、弱々しい。

恭太は桂の言葉に耳を疑う。憎からず思われているとはわかつていたが、自分の存在がそれほど匠に影響するなんて思つてもいなかつた。

「ほつとけるかよ。自分の幼なじみが間違つた方向に行こうつてのに、黙つてられるか。わかつてるとか？相手は男で、お前も男なんだ。いくら最近はそういう趣味の連中がおおっぴらに出てきてるつて言つたつて、万人が受け入れられるわけがないんだ。」

押し黙る匠にたたみかけるように言う桂の言葉。

（そんなの、俺だつてわかつてる。）

たぶん、匠も。

「幸せになんかなれるわけないだる。絶対一時的な気の迷いに決まつてるから。やめろよ、もう不毛なだけだから。」

わかつていてなお、諦めきれない想いがある。割り切れない想いがある。

「第一あのガキあれから姿も見せないじやないか。普段一人に執着する事なんて無い匠の口から、あのガキの名前が頻繁に出るようになつたときから嫌な予感はしてたんだ。接触が無くなつた今が不毛な想いから脱するチャンスだろうが。」

桂は正しい。一般論としてどうにもならないくらいに正しい。

けれど。

「桂にはわかんねーよ。」

夕暮れの屋上に、匠の声が低く響いた。

「言われた事なんて、全部わかつてる。俺が男であいつが男でないて、そんなのわかつてる。わかつてたつて止められないんだ。理性とか正論とか、それでやめられる事なら、とっくにこんな気持ち、

無くしてゐる。それが出来ないから。……。」

いつも強気な匠の声が弱々しくて、匠はそれ以上黙つて聞いていら
れず、屋上へ続く窓を乗り越えた。

いきなり乱入した気配に、一人が振り返る。

「恭太……。」

いるはずのない人物の登場に、一人は呆然としていたが、しかし立
ち直るのは桂の方が早かつた。

「何しに来たんだよ？ お呼びじゃないんだよ、帰れ。」

匠の前に立ちふさがつて恭太を睨み付ける。

「お呼びでないのはそっちでしょ。」

「何？」

「……匠の言うとおりだよ。別に男が好きな訳じやない。男同士が
どうこう事かなんて言われなくて良くわかつてゐる。わかつてたつて
どうしようもないんだ、この気持ちは。だけど。」

恭太の言葉から、自分の気持ちを知られてしまつた事に気付き、真
っ赤になつた匠を、恭太は見つめて。

「幸せになれるかどうか、なんて他人に決めてもらつた事じやない。
ガキがどんな理屈捏ねようと、おれはそんなの認めるつもりは

……。」

「アンタが認める必要なんて無いんだよ、桂先輩。問題は、俺と、
匠の気持ち、だろ？ おれは匠の事が好きだから。」

そう言うと恭太は桂を押しのけようと一步踏み出す。しかしその肩
を掴んで桂は邪魔する。

「好きなら、好きなやつの幸せ祈つて身を引いたらどうなんだ。好
きだからだけで突つ走るなんてお前のエゴだろ？」

「匠が俺の事好きじやないなら身を引くけど……。でも、元々誰か
を好きになるなんて多かれ少なかれエゴが発生するもんじょ。」

肩をつかんだ桂の手を思い切り振り払つて。

「冷静でいられる恋なんて、どこにもないからや。」

首まで真つ赤にしてうつむく匠に、手を伸ばす。

「鈍くて」めんね？ でも俺もずっと好きだったから。付き合つて
？」

「何馬鹿な事言つて……。」

「外野うるさい。桂先輩に言つてないから。」

恭太の無礼な言い方に桂が憤慨して何かを言おうとしたとき、「ごめん、桂。心配してくれるのはわかつてゐる。だけど、『ごめん。』そう言つた匠の言葉に、あきらめたようにため息をつく。

「しょーがねえ、今回は引いてやるよ。」

スキ見つけて別れさせてやる、と負け惜しみを言つて、桂は去つていぐ。

「匠？」

真つ赤になつてうつむいたまま、動けない匠に、恭太は近づこうとする。

「寄るなよっ！」

それに合わせて一步後ずさり、癪癩を起こす。

「なんなんだよお前、この間まで人の話も聞かないで勝手に暴走してたくせに！ 何いきなりそんな余裕ぶつこいてんだよ！ 立ち聞きしてんじゃねーよ馬鹿！」

「うん、だからごめんね？」

「『ごめんですむかぼけ！ 何が付き合つて、だ、ふざけんな！ お前なんか、お前なんか……』つ。」

要するに、思いもかけず自分の気持ちが恭太に知れてしまつたため、恥ずかしいやらいたたまれないやらでどうしたらいのかわからなくなつてゐるらしい。

必死に近寄るな、と叫ぶその姿がいつもの強気な態度からは想像できなくて、でも可愛くて愛しい。

「きらいだつ……も、お前なんてだいつきらいだつ！」

ちょっと前だつたらその言葉にだまされたかもしれない。けれど、匠の気持ちを知つてしまつた今、真に受ける事はない。

嫌い嫌いと叫びながら、けれど本当は好きだと、瞳が言つていた。

間を詰めよつとすれば逃げる身体を、それでも強引に手を伸ばして捕まる。それでも暴れる身体を抱き込んで。

出会つた頃は変わらなかつた背は、今では頭一個分、恭太の方が大きかつた。長くて大きな手に抱き込まれて、匠は身動きがとれなくなる。

「「じめんね……。」

こんな風に体温を感じるのは、匠の肩を抱いて泣いたあの日以来で、緊張する。

「はなせ、つて……。」

弱々しい声で匠がそう訴えてくるが、離してなんてやらない。今手を離したら、絶対に匠は自分の物にならない。

「好き。本気で好きだから。だから「じめん。匠の気持ち、全然考えて無くて、「じめん。勝手に自己完結して「じめん。ちゃんと話を聞こうと思つて探してたんだ。」

そしたら、思いがけない真実を知つてしまつたが。

「ねえ、俺の事好きだよね?」

腕の中、あきらめたのかおとなしくなつた匠に、自信なさそうに問い合わせると、思い切り足を踏まれた。

「いつてえ……。」

「お前ずるい。全部聞いてたくせして、今更。俺どんな顔すりやいいんだよ。何言えばいいんだよ。」

「普通にしてよ。それで、俺に好きだつて言つて?」

「やだ。」「やだ。」

悔しそうかる。恭太に主導権をとられるなんて、といつもの強氣で咳くけど、首まで真つ赤にしていたら全然迫力はない。

「……運命で、必然なんでしょ? 俺が立ち聞きしちやつたのも、全部。なら、今こつしているのも運命なんじゃないの。」

いつかの食堂で匠が言つた事をそつくり真似して言つと、まだ憎まれ口を叩きそうな唇を、素早くふさいでしまつ。

「んつ……。」

何日か前にも振れた唇を、もう一度感じならが、少しあびえて堅くなっている身体をほぐすような、軽いキス。角度を変えながら何度も繰り返すそれは、少しずつ深くなる。唇の端をそつと舐めるようにしながら、緊張をほぐす。薄く開いた匠の唇にそつと舌を差し入れると、一瞬びくつと身体を硬くしたが、すぐに力を抜いて。もづ、今更抵抗しても仕方ないと観念したのか、自分のそれを絡めてくる。そんな匠が愛しくて、恭太はその唇を味わう事におぼれる。どれくらいそうしていたのか。名残惜しげに口づけをほどくと、匠は足に力が入らないのか恭太に寄りかかってきた。

「……俺も、馬鹿だよね。」

ぼそつと言つた恭太を、匠が上目遣いに見つめる。

「こ」の間キスした時だつて、匠それについちゃ怒らなかつたのにね。気持ち悪いとか思つてたら、パンチの一発くらいはあつたよね、絶対。あれ考えたら、匠が俺の事好きだなんてわかりそうなもんなのに。鈍かつたななあ……つてつ！」

もう一度思い切り足を踏まれる。

「そう言つ事、臆面もなく言つた馬鹿！　あーもう、むかつく！」

「そう言つ俺が好きなんでしょ。」

しつつと言つてのける恭太は、やたらと余裕ありげで匠のかんに障る。

「……キスより先、したいな……。」

不届きな言葉を吐く恭太の頭を、今度は拳骨で思い切り殴つて。

「お前こ」のじこだと思つてるんだよ！」

「ガツ」「じゃなればいいの？」

「誰もそんな事言つてない！　てか、おれはお前なんか……。」

「好きだよね。」

「…………。」

嫌い、と言おうとしたのに断定されて、悔しくて。

匠はぐつと腕に力を入れて恭太の胸を押すと、自力でその場に立つ。

「必然で、運命だつて？　なら、俺がお前の事好きだなんて言わな

いのも、とりあえずこれ以上の事しないのも、お前の運命だ。」「

主導権を取り返すべく、宣言する。

「えええええー。」「

それはないでしょ、と追いすがる恭太。

「うるさい。そ、俺のDNAに生まれる前から書き込まれている。諦める。」

さつきまでのキスの余韻がまだ残つてゐる唇で、そつ言い切つて、匠は鮮やかに微笑んだ。

その笑顔は、恭太の大好きな笑顔で、この顔が見られるなら、しばらくはそんな運命でもいいかな、等と思つてしまつ。

きつといつかは。

周りがなんと言つたって、きつと幸せになれるから。たぶん。

匠に恭太が振り回されつつも。それすらも、必然。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0222f/>

たぶん、それすらも必然で

2010年10月10日01時30分発行